

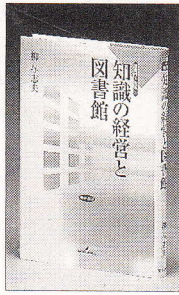
ニュースの本棚

「ず・ぼん 図書館とメディアの本」編集委員

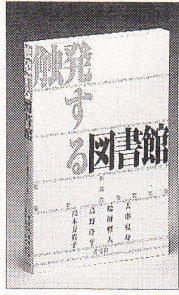
沢辺 均



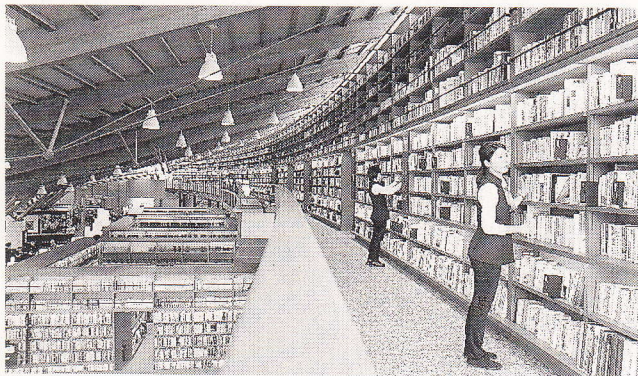
楽園計画編「図書館が街を創る。『武雄市図書館』という挑戦」(ネコ・パブリッシング・1500円)



柳与志夫著「知識の経営と図書館」(勁草書房・2520円)



大串夏身・鳴海雅人・高野洋平・高木万貴子著「触発する図書館」(青弓社・2100円)



今春リニューアルした武雄市図書館

■武雄市図書館の試み

「知の提供」の手段とは

佐賀県にある武雄市図書館が今年4月にリニューアルオープンし、貸し出しとならんで本と雑誌の販売を行っている。その武雄市図書館に9月に行ってみた。リニューアルについて樋渡啓祐市長が「図書館が街を創る。」で語っている。

図書館と書店を運営しているのは、指定管理者となったCCC(カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社)だ。

この武雄市のトライアルには批判も多い。指定管理者制度は安上がりのための下請け化だという従来の批判に加えて、図書館利用カードが「Tカード」になることよって、読書記録がCCCに利用されるといふ危惧の声もあがっている。

市長の記者会見をネットで見て直してみた。市長の改革意欲は抜群に高いが批判への対応は乱暴にみえる。逆説的になるが、このある種の乱暴さがこれほどの改革をあつさり実行する力の源なのかもしれない。

貸し出しだけか？

図書館の重要な仕事は、すべての人に知を提供すること。その提供は無料で貸し出しをすることだけなのか？ 三浦しをんの『舟を編む』(光文社・1575円)に描かれるように、例えば辞書の制作は単なる営利事業にとどまらず、知の提供にのみなみならぬパトス(情熱)がなくしてはならない。そして多くの人が購入することで、さらに知の提供が行われるという循環がそれを支える。その知の提供には、図書館という無料の場所も重要だし、販売を通して再生産されることもまた大切なのである。だからこそ、書店経営がむずかしくなりつつある人口5万人程度の地方で貸し出しと販売を行う図書館が生まれたということが重要なのだ。

広がる議論の幅

武雄市のトライアルの背景には、この間の図書館のありようについての議論の幅の広がりがある。図書館の側から「情報源の生産」を視野に入れた「知識の経営と図書館」や「図書館では静かに」といったルールまでも再考する「触発する図書館」など、パラダイムに挑戦するかのよう。

武雄市図書館のにぎわいには本と雑誌の販売が一役買っていると思える。これまでのやり方から一歩進んでトライアルをいくつもすることこそ、今の図書館、社会に求められていることではないだろうか。

武雄市図書館で利用カードを作ってみた。カードには図書館利用だけのもの、ポイントがつくもの、TSUTAYAでのレンタルもできるものがあり、利用者が選択する。作ったのは図書館/ポイント/レンタルと三つの機能のあるもの。利用者は隔月刊。

◇さわべ・きん 56年生まれ。ポット出版会長。「ず・ぼん」紙版は年一回程度、電子版は隔月刊。